

II 章 研究内容

I 章においては、これまで私たちが取り組んできた研究の経緯と、本年度研究の方向性について述べた。そして、研究の重点課題を、言語活動を充実し思考様式を共有化する授業づくりに定め、そのために、思考様式を個が「実感・納得」する教材開発と、集団として「承認・合意」する支援の構築に取り組んできたことを述べた。

本章では、このことについて、実践を交えながら研究内容を具体的に論じていきたい。

1 言語活動を充実させる場面

授業におけるほとんどの活動は、言葉を介して行われる。では、子どもが思考様式を共有化するための言語活動は、授業のどの場面で充実させることが有効なのだろうか。私たちはこれまでの実践をもち寄り、どのような場面で言語活動を充実させる提案があったかを振り返った。すると、次の2つの場面に限定されることが分かった。それは、子どもが自力解決する前と後の場面、つまり見通しを立てる場面と振り返りの場面である。

思考様式は考える視点や方法等を表したものである。そのため、見通しを立てる場面で子どもに意識付けておくことで、子どもが問題解決の場面で思考様式を用いることを促し、「実感・納得」「承認・合意」につながる。また、振り返りの場面で子どもが思考した過程を振り返ることで、思考様式のよさを「実感・納得」「承認・合意」し、新たな問題場面で用いることにつながる。

小学校学習指導要領にも、「各教科等の指導に当たっては、児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるよう工夫すること」^{*1}と、「見通し・振り返り」学習活動の重視が示され、さらに小学校学習指導要領解説総則編においては「特に規定を新たに追加したもの」^{*2}と強調されている。この「見通し・振り返り」学習活動は、小学校、中学校双方の学習指導要領^{*3}に示されており、義務教育9年間を通し、一貫して重視し指導すべき事項と言える。

この見通しを立てたり、振り返ったりする学習活動の重視は、「『思考力』育成には思考様式によって『思考の自覚』を促すことが重要である」という本校のスタンスと軌を一にするものである。

佐藤真氏（兵庫教育大学大学院教授）も、その著書で「見通し・振り返り」学習活動が、思考力をはぐくむ上で重要であると述べている。

「見通し・振り返り」学習活動では、自己の学習状態を常に制御・統制したり、調節・調整したりするという機能が必要であり、そのような働きがなければ、形だけの「見通し・振り返り」学習活動に陥るということには留意しなければならない。・・・(中略)・・・児童・生徒が「見通し・振り返り」学習活動において、見通す目的・内容や振り返る位置・内容を整理し、分析し、総合しながら、常に自らの学習を調整することが、学習意欲を向上させるとともに、思考力・判断力・表現力等を育むためには重要である。
(佐藤真『各教科等での「見通し・振り返り」学習活動の充実』1-1『新学習指導要領と「見通し・振り返り」学習活動』教育開発研究所、2010、11頁)

また、安彦忠彦氏（早稲田大学教授）も、同様に思考力育成における「見通し・振り返り」学習活動の重要性を述べている。

* 1 小学校学習指導要領 第1章 総則「第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」2（2）の記述から引用。
* 2 小学校学習指導要領解説総則編 第3章 第5節 4の記述から引用。
* 3 中学校学習指導要領では、「第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」の2（6）で示されている。

今次改訂の最終的なねらいは、『思考力等』の育成とその質の向上である。その中で例示されている4つの能力は、①体験から感じ取ったことを表現する力、②情報を獲得し、思考し、表現する力、③知識・技能を実生活で活用する力、④構想を立て、実践し、評価・改善する力^{*1}である。これらの育成には、どれも「見通し」と「振り返り」が伴うことによって、その力が優れた質のものになる。
(安彦忠彦『各教科等での「見通し・振り返り」学習活動の充実』1-2『生きる力と「見通し・振り返り」学習活動』教育開発研究所、2010、17頁)

「見通し」を立てる場面では、学習問題に対して過去の類似した問題を想起しながら、どのようなところに目を付け、いかに考えていけばよいかと「方法の見通し」を話し合ったり、おおよそどのような結果になるかと「結果の見通し」を話し合ったりする。このことは、まさに思考様式を選択したり、創出したりする言語活動と言えるだろう。

「振り返り」の場面では、問題を解決するに至ったプロセスを吟味することになる。何に目を付け、どのように考えたことが有用であったか、見通しと比べながら振り返る。授業の終末に自分の学びを振り返り感想を書く場だけでなく、集団吟味の場も、個が他者の意見を聞いて自分の思考を見直す「振り返り」の場面と言えるだろう。このことは、まさに思考様式を吟味し、学習集団で共有化しようとする言語活動と言えるだろう。

この「見通し」と「振り返り」の両者は、切り離すことのできない関係にある。学習の「見通し」を立てるためには、それまでの学習の「振り返り」が不可欠である。また、「振り返る」ことは、それまでの「見通し」がどうであったかを検討することでもあり、次の「見通し」を立てることにもつながる。

このように考えていくと、小学校学習指導要領で示された「見通し・振り返り」学習活動を言語活動の場面として充実させていくことが、思考の質を高め、学習集団で思考様式を共有化することにつながっていくと考えられる。

2 個の「実感・納得」を促す教材開発

個々の子どもが思考様式のよさを「実感・納得」するには、よさの裏付けとなるものが必要となる。言語活動を充実させる際、危惧されることは、裏付けとなる事実とつながっていない言葉が用いられることによって、机上の空論となってしまうことである。自分以外の誰かがいくら思考様式のよさを主張しても、自分で思考様式を使って問題を解くという体験をしてみないと、そのよさを「実感・納得」することは難しい。そこで、個々の子どもの体験を基にした言語化を大切にしたい。私たちの言う体験は、教科によって様々に捉えられている体験に加え、それらによって引き起こされる思考様式を選択したり用いたりして考えること等も含んでいる。このような体験がよさの裏付けとなり「この思考様式を用いてよかった。確かに問題解決に役立つ考え方だ。」と、「実感・納得」につながるのである。

佐藤真氏（兵庫教育大学大学院教授）も、次のように、「体験」によって得られた個々の価値を言語化していく学習が重要であることを述べている。

改めて言うまでもなく、「体験」は、子どもの心身の発育・発達という成長の源泉である。特に、目指すべき「言語や体験などの学習や生活の基盤づくり」を学校教育現場で具体的に進めるためには、学習内容が子どもの実生活と意識的に関係付けられ、発達段階に応じた自然・社会・文化体験等の適切な機会を設定する必要がある。すなわち、「体験による実感」と「言葉による納得」の双方の充実が、今後のわが国の学校教育では重要なのである。…（中略）…「体験」には、「自分自身の身体を使い、感覚的に身の回りの対象に働きかけ、自分なりの価値や意味、そしてかわり方を見出していく営みである」という特質があるのである。

（佐藤真『体験学習・体験活動の効果的な進め方』教育開発研究所、2007、3頁）

*1 『「生きる力」の育成を目指す教育内容・目標の構造（イメージ案）』（中教審初等中等教育分科会教育課程部会平成17年11月30日配付資料）を参照。